

いう「同時代および後生における受容」の実態を明らかにし（評者は「受容」という用語の使用はあまり適切ではないと思う）、鳥伝神道の歴史的な性格を明確にするためには、むしろ基本的に、その生涯を通じて規清が、どのような社会階層の人々と関わりを持ち、どのような社会的欲求を自己の問題として捉えていたのか、またどんな人々の支持と援助を得ながら活動を展開していったのか、という問題を広く明らかにしてゆくことが必要だと思われる。それは既述のように、思想の内容を理解する上でも不可欠な手続きだからである。序章には、「上は一品親王より下は奈落の底に至りて乞食非人にも附合、上下の人情に通ずる事、既に東国三十三ヶ国に行さる国なく、八宗九宗の蘊奥を探る遍歴十二年」という『和軍蜻蛉備』の一節が紹介されているだけなので、「門人帳」に相当する史料はまだ見出されないのかもしれないが、著者のさらなる探究を期待したい。

（天理大学教授）

中村生雄著

## 『祭祀と供儀——日本人の自然観・動物観』

（法蔵館・二〇〇一年）

白山 芳太郎

本書は、日本における sacrifice、すなわち供儀の実態とその思想について研究したものである。

特に、神社祭祀や村落祭祀に残存するイケニハ儀礼の考察によって、日本人の自然観や動物観について明らかにしようとしている点で特色ある研究と考える。

ところで、『日本書紀』の雄略紀に、狩獵採集生活時代の神と人との交わりを反映した話が出てくる。

それは次のような話である。

ある日、天皇は、葛城山で「一言主」という神と出会った。

そこで、一頭の鹿をめぐって、互いに鹿追いをした。

しかし、両者とも、矢を全く放たなかった。

こうして一日を過ごし、久目川のところまで一言主が送ってくれ、そこで別れたというのである。

おそらく、久目川が、神域との境界なのであろう。

ところが、こういう穏便なケースは、雄略紀では全く稀なのである。

雄略紀における「狩り」といえば、いとこの市部押磐皇子を狩りに誘って殺害したという狩りや、吉野で狩りをしている最中いかって御者を切り殺したという狩り、葛城での猪狩りで舎人を殺しかけ皇后から止められるというような狩りが、普通なのである。

例外は、つぎのような他愛もないケースである。

天皇が狩りをしていて、アブにさされた。

ところが、トンボが飛んできて、そのアブをとって食べた。

そこで、歌を作って、このトンボをほめた、というのである。

この話も、むしろ自分の血を吸ったアブに対し、怒り心頭に発したと読むべきであって、狩りに行くと、血が頭にのぼってしまい、何をしでかすかわからない、というのが、この大王の性質なのである。

こういう血気盛んさが、狩りには必要なのであって、そういう未だ農業が始まらない狩猟採集生活時代の食と、その食を得るための労働と、その労働がもたらす骨格や筋肉や熱血的な心持ちは、この大王にしかみられない特殊性ではなかったと思われる。

このような労働を責務とする一家の長の一般的傾向だったろう。

なお、この大王の持つもう一つの特色は、若い女性をみかけると見境なく求婚してしまい、しかも冷めやすいという難点なのであるが、ともかくこのような狩猟採集生活時代そのままの

激情家であったことだけは、確かであろう。

雄略紀と並んで武烈紀もひどいが、そういう話があまり知られていないのは、戦前に愛読された岩波文庫の『日本書紀』が、天皇にとって不都合な箇所はカットするというような墨塗りをしていたためである。

その血気盛んな雄略天皇が鹿をみつけて矢を放たない、などというようなことは、不思議きわまりないケースなのである。だから、記憶に残り伝承されたのであって、徳を称えるための全くの作り話とは思われない。

逆に、そういう不徳な伝えを持つ大王に、こういう珍事があったと語り部が伝承してきたのであって、『日本書紀』編者の書きたくなさそうなケースなのに、祖先以来長く語り部として仕えてきた者として、ノーカットで書き留めてもらわねば困ると主張したものであったと思われる。

ただし『日本書紀』編者も、こういう語り部の要求に無抵抗だったわけではない。

『日本書紀』編者が書きたくない伝承を書き留める場合には、必ず一言コメントを潜ませている。この天皇の場合は「大悪天皇」という一言であった。

このように忌憚なく書くのは歴史家の職分なのですという言い訳が、コメントの一言なのである。そのような忌憚なき記載によって、本書を手にとる未来の天皇に対し、不徳なことをなされば歴史に残りますので不徳な行為は未然に思いとどまって

いただきたいとする歴史家根性なのである。

そういう個所は同書の随所にみられるが、たとえば、仏教伝来後まもなくの天皇など「神を敬い仏を崇」んだ天皇であるとか「神を軽んじ」た天皇であるとかコメントをしばしば書いている。

ところで、雄略天皇は、宋への上表文の「倭王武」（『宋書』）とされ、また埼玉県稲荷山鉄剣銘と熊本県江田船山古墳出土の刀銘とによって実在の大王とされている。

そのような大王における神と人との交わりであるから、興味深いのである。

つまり、このような無茶者であっても、神域内における神の専有物は犯さなかったという光景を、今日に伝えているのである。

そういうタブーは、原始の時代だけのものではなく、各地の民俗文化に今も残っている。もちろん、時代とともに変容する部分と変わらざる部分との集合体としてである。

本書の構成は「動物供儀と日本の祭祀」「日本宗教のなかの人と動物」「柳田国男の供儀理論」の三部から成る。

各部には、それぞれ次の諸論文が収められている。

第一部の「動物供儀と日本の祭祀」には「イケニへ祭祀の起源」「動物供儀の日本的形態」「狩猟民俗の身体観」「非稲作の祭祀と神饌」の四論文が収められている。

第二部の「日本宗教のなかの人と動物」には「古代呪術と放

生儀礼」「祭祀のなかの神饌と放生」「殺生肉食論の受容と展開」「供儀の文化・供養の文化」「動物供養と草木供養」の五論文が収められている。

第三部の「柳田国男の供儀理論」には「人身御供と人身供儀」と「一目小僧の供儀解釈」の二論文が収められている。

次に、研究の契機であるが、著者における「供儀 sacrifice」というテーマとの出会いは、イエス・キリストの十字架上での犠牲死という特異な死にたいする驚きと違和感であり、それは氏がドイツに滞在していた八〇年代終わりごろであったと「あとがき」に述べている。またそれは、著者の問題意識が、未開社会の動物供儀への関心から発生したものでなければ、アステカ文明などにみられる人身御供のようなものへの関心からでもなかったと著者自身、語っている。

次に、本書の内容を追ってみよう。

序章「祭祀と供儀の比較文化序説」においては、まず「日本書紀」などいくつかの史料や事例から、日本人の心的傾向として血を忌避する態度が時代の進展とともに強まっていったと指摘し、そしてそれは生業の比重が狩猟・牧畜よりも稲作農耕に大きく振れた結果であると説く。

続いてヨーロッパのキリスト教社会で展開した血のイメージと信仰を知るため、イエスが十字架にはりつけられるという事件へのヨーロッパにおける反応を分析し、それと日本における血のイメージとを比較する。そして「神と人間との関係を設定

するために行われる供犠儀礼」が、一方では「神の専有物である血の奉獻というかたち」をとり、もう一方では「動物の血と正反対の純白の餅や酒」をもちいて行われ、その対照的な特徴は、神を「自然から超越し、かつそれを創造した唯一の存在」と見るか、神を「自然に内在するカオスの力」と見るか、といった一神教と多神教の差につながっていくと考察する。

第一部第一章「イケニへ祭祀の起源」においては、『今昔物語』や「宇治拾遺物語」などにみられるイケニへ譚の意味を分析し、その結果「神人共食という神祀りの形式は、人が自然の神に食われる原初のイケニへの形態が、人が文化の神とともにおなじ動物をイケニへとして食べる形態へと移行することによって登場した」とし、それまでは人をイケニへとして食っていた自然の神が、新参の文化の神の威力に屈し、里人のまえから姿を消すことによって「人身供犠という残酷で野蛮な習俗は終わりを告げた」と語られる」と考察する。さらに「新しい文化の神が、かつての娘のイケニへの代わりに人の手で生ケ乍らに鹿や猪などをそなえられ、それを人と共食することになる」とし、自然の神にたいする人のイケニへが文化の神にたいする動物のイケニへに変化したと説明されるときも、それは「たんに供物の内容が人から動物に変化したことだけが語られているのではない」とし、ここで新たにイケニへとして使用される動物は、「かつての里人の娘の代用であるとともに、退治された自然の神の分身でもあった」と考察する。

第二章「動物供犠の日本的形態」においては、人間がみずから身体を責めさいなまれ、その果てに絶命するもつとも忌まわしい場面であるはずの「地獄での応報の姿が、じつはイケニへ説話というフィクショナルな空間を母胎として生まれたものであり、そこに古代の神と人との食べることを介した根源的なむすびつきがあった」とし、またそこから「日本におけるアルカイックな生命感覚、すなわち自己と自然との双方に連続してなされるいのちの感覚といったもの」を読みとることができると考察するのである。

第三章「狩猟民俗の身体観」においては、山の生業が狩猟から焼き畑、そして狭小ながら水田稲作と展開していくなかにあつて、儀礼の主眼も「豊猟の子祝から雑穀さらには稲作の子祝へと重点を移していくが、模造獣の腹に詰められた餅や小豆飯を「生殖器や胎児というもつともなまなましい生命の部位」とみなしていることを指摘して「みずからの生命の再生強化のために食べる」とし、山野の生命の力、さらには生殖力そのものが「食べるという人間のもつとも根源的な生命維持行為をとおして、自然界から人間の側に奪取」されたと解釈し、人間の「身体」と自然界の「身体」との「食の直接性による合一」の信念がそこにあると説く。

第四章「非稲作の祭祀と神饌」においては、非稲作民の祭祀のなかに「自然の脅威に恐れおののく人間の姿」が浮かびあがってくるとし、自然は「人間にたいする圧倒的な勝者」であつ

て、両者がなかよく「共存するなどといった事態は想像すらくさない」とし、自然が「優勢な位置にあることを自明の前提」とした上で、聖地をつくり、そこに参入することで、「自然の威力を和め、その恵みを手に入れよう」としたのではないかと説く。

第二部第一章「古代呪術と放生儀礼」においては、古代の放生とか殺生禁断とか肉食禁止といった「外形的には仏教的で慈悲にみちた行政措置」が、実際は「古代的アニミズム的な呪術」にほかならなかつたとし、動物を解放し罪人の生命を助けるのは「国家の道徳性のゆえでも為政者の慈悲深さ」のゆえでもなく、「人間と動物と山野河海の自然をつらぬいて発動するいのちという不可視の力をみとめ、その超自然的・神秘的な存在あるいは靈力にはたらきかけて降雨や疫病退散などといった攘災招福を実現しようとする呪的行為」であつたと説く。

第二章「祭祀のなかの神饌と放生」においては、石川県羽咋市の旧能登国一宮気多大社の「鶉祭り」の調査結果をもとに、放生の観念は、仏教受容後ほどなくの日本では「純然たる攘災招福の呪術として国家祭祀の一翼を形成」していたものの、その後の歴史的経過においては「八幡などの神社祭祀に組み込まれていく」が、それに応じて「古来のイケニへ儀礼を改変する力を發揮」していき、そのような趨勢のもと、この鶉祭に見られるごとく「神饌としてそなえられた生きものが殺されるどころか、反対に神仏の加護を得て解き放たれる」という逆転劇と

なつていったのであり、「新しい人と動物の関係を探りだそうとした貴重な試み」であつたと説く。

第三章「殺生肉食論の受容と展開」においては、前近代の真宗寺院がみずからの仏事のうちから必ずしも「殺生肉食」を排していなかつた例として、親鸞の正忌法要である報恩講の最終日に「東西本願寺がともに鯉を租のうえで切り割いて仏前にそなえ、またそれを料理して参詣人にふるまう俎直し」の行事が行われていたことを紹介し、地方の報恩講でも「料理が精進に限定されるようになったのはさほど古いことではなく」「魚鳥はもちろん時には四足獣までもふんだんに食べることでできる厳冬の行事」であつたとし、「山野河海の動物たちが日々の生業の獲物として、あるいは祀りにかける贄として、人びとの暮らしと深くむすびついていた」ことを明らかにする。

第四章「供儀の文化・供養の文化」においては、動物殺しの罪責感を軽減するために人類が発明した方法が供儀と供養であつて、動物を神の賜物と見て、賜物の内の一部を神に贈り返すやり方が供儀であり、殺した動物の霊を弔う方法が供養であるとするともに、自然を畏怖の対象と見て、そのような「畏怖すべき野生の存在だからこそ、それは贄として神と人をむすびつける役割を果たしえた」と述べる。

第五章「動物供養と草木供養」においては、前章での供儀と供養の問題を、動物殺しに限定するのではなく、より一般化した時に、供養の文化の延長線上に動物供養と草木供養があると

し、「事後処理システムとしての供養儀礼」について、「自分たちの生業が引き起こす動植物の死や自然資源の奪取についての痛みやうしろめたさの感情」が、いったん「供養の回路を通すことで恒常的に解消されるならば、それは容易に、歯止めなき自然を公認する心理的・文化的装置として機能していく」と説いている。

第三部第一章「人身御供と人身供儀」においては、『仏教史学』誌上での柳田国男と加藤玄智の人身御供論争を分析し、この時期の日本の識者の常識にとつて「かつてこの国でカニバリズムや人身供儀が実際に行われていたなどと公言するのは、戦わずして西洋列強の威光に屈服してしまふことであつたという事情も無視するわけにはいくまい」とし、その理由は「キリスト教的な倫理観念を共有する西洋列強にとつては、人身供儀としてのイケニへの問題は二千年まえのイエス・キリストの十字架上の死によつて完璧に終止符が打たれたのであつて、これ以降のキリスト教世界には、みずからの身体をイケニへとしたイエス・キリストの象徴物たるパンと葡萄酒さえあればよかつたから」と説くとともに、「イエス・キリストの肉であり脂であるパンと葡萄酒は、カニバリズムや人身供儀はいわずもがな、動物供儀などを行うような未開野蛮の宗教段階をキリスト教じたのが克服したことのあかしなのであつて、それは彼らの奉ずる高等宗教と非宗教の未開野蛮の宗教とを識別する指標」だつたと述べる。

第二章「一目小僧の供儀解釈」においては、柳田国男の民俗研究では「供儀の問題はきわめて重要な位置をしめていた」にもかかわらず、それが必ずしも「十分な実りを見せることなく終わり、また後代の柳田国男研究から見てもそれは適切な評価を得てきたとは言いかねる」ところがあつたとし、そのような柳田の供儀解釈もふくめ「供儀という人類共通の文化装置も一度全体的に洗いなおすことの必要性は、いよいよ大なるものがあ」と説く。

\* \* \*  
以上の論考は、従来不十分であつた日本の「供儀 sacrifice」に関する研究を大きく前進せしめたものである。

例えば、神社祭祀や村落祭祀に組み込まれたイケニへ儀礼が、外来宗教としての仏教がかかげた生類への慈悲の思想との接触により、本来のイケニへ儀礼の持つ思想や精神を換骨奪胎し新しい人と動物との関係を生み出したケースと捉えたのは適切な把握であつたと思われる。

その場合、イケニへとして供えられた動物が逆に解き放たれる「放生」という儀礼について、全国各地に実際に足を運んで精査し各種の実態を明確にしていることも、大きな学問的成果といわねばならない。

わけでも、柳田国男のような日本の民俗を稲作文化に集約して把握しようとする枠組みから分離された真の民俗学を構築し

ようとする場合、稲作以前に関する考察、稲作以外に関する考察を充実させていくことが重要であることを身をもって示したこと、イエス・キリストの十字架上の犠牲死に集約されがちな西洋の供犠理論を視野にいれながらも、それとは別個の文脈上に供犠を配置しようとした斬新な試論を展開したことは、一応の見通しをつけたものとして重要な意義があると思われる。

本書におけるこのような供犠に関する幾多の新知見と新たな供犠理論は、この分野に志す今後の研究者に対し拠るべき基盤的研究を示したものとして、高く評価されるものであると考える。

(皇学館大学教授)

八木公生著

『天皇と日本の近代』(上・下)

(講談社現代新書・二〇〇一年)

中村 生雄

1

八木公生氏の新著『天皇と日本の近代』の性格を、一言で説明するとしたら、どう言うべきか？

明治憲法と教育勅語を貫く思想の特質を鋭く抉り出した近代政治思想研究の新たな達成、それとも、教育勅語の実質的な起草者である井上毅を近代日本の傑出した思想家として位置づけたユニークな思想家論、それとも、教育勅語という近代日本に絶大な影響力を及ぼしたテクストの綿密にして厳格な注解書、などなど。

そのいずれでもあり、また、そのいずれにも収まりきらないところに、本書の特徴があり、また、その魅力も、むずかしさもある。まず最初の前置きとして、とりあえずは、そのことを言っておきたい。

そのうえで、そのような公式的な本書の性格づけとはやや離れたところで、評者は、新書としてはまさに異例の上下二冊本